小澤儀明君の死

本間不二男

小澤儀明君の死が地質學會にとつて換へ難い大損失であつたことは今更ら贅言を要せぬことであるが、友人として第一高等學校以來の彼れの私的生活を凡そ知つてゐる筆者にとつては、これと關聯して天才の生が如何に徐々に蝕はれて行つたかを觀、眞に無量の感なきを得ない。

彼れの一高にあつた時代は或る意味において向陵史中絶後の黄金時代であつた。當時全國の高等學校は合せて八校に過ぎず、世人から今日の高等學校よりは多少尊敬の目を以つて見られた樣に思つてゐる。當時一高生の士氣を最も鼓舞したものは、彼れが一年生の時野球試合において早稲田大學を七對零、慶應大學を四對零で敗り十數年振りで全國に覇を唱へたことである從つて選手以外の生徒も盛にスポンヂボールを手にして寮庭で野球に耽つたものである。而して彼れの姿も此等の生徒の中に見出された事は勿論で、彼れの投手振りは尚ほ活き活きと筆者の印象に殘つてゐる。

世界の事情を一變せしめた歐洲大戰は我等の中學生たりし頃に起り、一高在學中に了へた。筆者の最初寄宿寮に入つた時寮費は食料とも七圓たりしものが三年後寮を出る頃には十二圓となり小澤君が出る頃には十五圓になつたと記憶する。又た世界を風靡した帝國主義は獨乙帝國の沒落と共に民主主義によつて入れ換へられ、所謂勞働問題なるものが漸やく擡頭し、職工のストライキと言ふ現象が起るに至り、其の善惡がしきりに議論されたものである。

此の如く社會の諸相が急激に變化しつつある

間に小澤君は甲州より出でて一高に入り、帝大に入り、學位を得、學士院賞を賜り、海外に留學し、最後に忽焉として逝つた。

彼れの短命なりし一生における此の突擊的前進は日本の社會狀態の急變に比して更に數倍も大であつたと言へやう。短命なりし彼れの一生も其の成就したる精華の量から見れば決して漫然短命と稱すべきものではなかつた。實に彼れは當代の學者が數十年を費すも尙ほなし得なかつた二、三の大研究を完成したのである。彼れの劃期的大研究が何々であつたかは讀者の充分諒知する所であるから茲に言ふ必要もないけれども彼れが如何にして此の研究を成就し、何が彼れを殺したかを少し述べて見なければならぬ。實に之を一言にして蔽へば、其の研究の完成は眞に彼れの決死的努力によるもので、彼れを殺したのは我々が暗に彼れを日本地質學界の選手に見たててしきりに激勵し、休息することを敎えなかつた事に一原因があると思はれる。

終りなき科學研究に對する選手となり猛然として疾走を續けるならば久しからずして倒れなければならぬことは當然ではなかつたらうか。

筆者は彼れの友人として此の事に關し忠告する時期をもたずして彼れを失つたことを深く恥づる。昨年八月十二、三日の頃彼れと東京に於いて僅に會談した時彼れの甚しく興奮してゐるのが見えた。彼れはもつと休息しなければならなかつたのである。

筆者は本年一月信州高遠町に遊び彼れの宿泊した木祖屋旅館に宿泊し、彼れが赤石山地の戶臺の中生層を見學すべく此の地に宿泊した時の彼れの印象を親しく聞く事が出來た。當時の彼れは此の宿の人々の眼に丈の高い痩せた弱々しい體質の人に見えたさうである。然も前夜二時迄人々と坐談し、翌朝は早く起きて同行の人(略ぼ同年輩の某大學生)を促して共に戶臺に向つたのであつた。此の行動は彼の奮鬪的な氣性の印象を遺憾なく宿の人々に植ゑつけたらしく幾度も之を繰り返へして話してゐた。此の話の中筆者に慄然として膚に粟を生せしめたものは彼

れが弱々しい體質に見えてあつたといふ一言で回顧すれば當時彼れは秋吉臺方面の地質研究に其の心身を傾倒し體力の甚だ劣へて居た時期であつた筈である。然も彼れは必要あつて此の地に遊び赤石の一角を突破したのである。

此の奮闘的態度は實に彼の全貌を躍如たらしむるものであるが、此の旅行前後屢々彼れは京都に遊び筆者の客に宿泊したのに拘らず、筆者が他人に見えた彼れの身體の衰弱を見破り得なかつた不甲斐なさがつくづく情なく思はれたのであつた。彼れは殆ど病氣をした事がなかつたので我々友人仲間では彼れを壯健なる人と見做してゐたのである。然し事實は以上の如く他人より見れば彼れは研究の爲め常に生死の間を彷徨する程の努力をいたしてゐたのであつた。關東地震後彼れが小石川原町の某下宿に居た頃は常に午前二時迄讀書し、朝は人と同じく七時頃には起きてゐた。此の努力によつて彼れは關東地震の際の東京大火によつて全燒せしめられた打擊に忽ち打ち勝ち、大阪停車場に於いて秋吉臺の研究材料を入れたトランクを盜まれた痛手をも直ちに全癒し得たのであつた。此の二の災難の何れの一でも常人が受ける時には到底數年間は其の打擊から免れることが出來ないものである。

小澤君は此の如く努力して彼の大事業を成就した。然しながら海外に留學することが決定した頃、稀れに身體の何となく疲勞せることを洩したものである。而して彼れが海外にある間非常に興奮して居つた事は折々の音信によつて明らかに讀まれた。筆者は當時なるべく彼れの心を沈靜せしめる樣な手紙を送つたと記憶してゐる。

小澤君の死は眞に取り返すことの出來ぬ我々の手落ちであつた樣な氣がする。小澤君の奮闘を我々は拍手しつつ唯眺めて居てはならなかつたのである。我々は彼れに休息することを奬めなければならなかつた。

勉强家を賞め讃へて更に精勵を强いること勿れ、彼れには休息こそ必要なのであつた。

天才に對しては母の慈愛に似た友情が大切である。之が小澤君の死と共に最も判然筆者に感せられたことである。

伊太利ところぐ（三）

瀧川規一

〔アアシスト黨と詩人ダヌンチオ〕　フ黨が世界大戰に參加した歸還兵を抱き込んで今日の隆盛をなす基礎を作つたと云つて了へばそれまでであるが、フ黨と雖も斯く單純に政黨化したのでなく、また斯く簡單にフ主義の深さと大きさとを築き上げたのでない。今日まで幾多の消長を經て來て居る。政黨が主義化し理論化して識者を傾聽せしめるに至るのは全權を握つてから後のことである。政黨が擡頭し始める頃は只敵を仆す爲めの武器の一としてて一本調子の旗印を振り翳すに過ぎないのが常である。然るに最初から主義理論を說く政黨及び社會運動には外來の輸入運動のお先棒を務めてゐることが多いフ黨の經緯を仔細に觀察する時、フ黨が伊太利獨得の主義政黨たるに至るまでには矢張り上述の一本調子で運動を續けてゐた。フ黨は一九一九年頃には戰爭參加の舊軍人から餘り多くの援助を得て居なかつた。フ黨が國政に直接干與したのは詩人ダヌンチオが有志義勇軍を率ゐてフユーメ(Fiume)を占領した後のことである。

世界大戰に際して伊國は主戰論者と非戰論者とが論爭を續けた結果、主戰論者が輿論を制し伊國も亦佛英の側に加つて大戰に參加することになつた。然るに參加の際同盟國との協定に不